

骨折リスクと骨密度測定の呼びかけを

◆骨粗鬆症骨折の中で最もリスクが大きい大腿骨近位部骨折

10月20日は、国際骨粗鬆症財団（IOF）が定めた「国際骨粗鬆症デー」にあたる。「世界から骨粗鬆症による骨折をなくす」ことを目標に、世界各地で啓発イベントが開催される。骨粗鬆症は、長年の生活習慣などにより骨がスカスカになって骨折しやすくなる病気で、最初は自覚症状がなく、腰や背中に痛みが生じて医師の診察で見つかることが多い。日本における骨粗鬆症の患者数は、約1,280万人（男性約300万人、女性約980万人）と推計されている。女性に多いのは、女性ホルモンの分泌量減少などにより、閉経後、急激に骨密度が減少するからだ。

骨粗鬆症による骨折で最もリスクが大きいのが大腿骨近位部（太ももの付け根）骨折で、治療しても歩行が困難になり、さらに1～2年以内に死亡する確率が急激に上がる。

◆閉経後の女性の4割弱が骨粗鬆症検診の経験無し

骨粗鬆症の検査は、「骨密度測定」ともいわれ、2種類のエックス線を用いるDXA（デキサ）法が最も精度が高いとされている。DXA法で成人の平均最大骨量の70%以下の場合、骨粗鬆症と診断される。

骨密度測定機器の効率化も進んでいる。島津製作所は、2019年8月、AI技術を用いた画像処理によりDXA法で必須だった熟練者の手作業を自動化した。これによりエックス線画像を高精度かつ迅速に提供でき被曝量も従来の半分以下にした。

最大の課題は、検査受診率をいかに上げるかだ。ファイザーが、18年7月、50代以上の閉経後の女性3,168人を対象に行った骨粗鬆症に関するインターネット調査では、骨粗鬆症の検査を「定期的に受けている」はわずか13%で、「一度も受けたことがない」と回答した人は39%だった。検査を受けたことがない理由の上位は、「検査を受けに行くきっかけがなかったから」（41%）、「気になる症状がなかったから」（40%）で、自覚症状に乏しい骨粗鬆症故の難しさを示している。

IOFは、16年から1次予防として骨密度測定の普及を掲げている。日本でも、骨密度測定に関する情報提供と啓発を強化することが期待される。【秋元真理子】